

# 図書館だより

Bulletin of the  
Hokkai-Gakuen University  
Library



ほんのむし

# 3

vol.38

北海学園大学附属図書館報  
第38巻3号(通巻215号)

2016-12-1

## 西欧の十字路ベルギーの苦悩

法学部教授 松尾 秀哉

## 逆境をいかに生きるか

法学部講師 中條 美和

## 加の国見聞録 ～この夏、レスブリッジにて～

図書館職員 島岡 淳平

卒業年次・修了年次の皆様へ／編集後記／図書館からのお知らせ

# 西欧の十字路

## ベルギーの苦悩

法学部 教授  
松尾 秀哉  
まうお ひでや



### ■ヨーロッパの十字路 ベルギー

「ヨーロッパの国」と言う時、皆さんはどの国を思い浮かべるのでしょうか。最近話題になったイギリスでしょうか。ワイン好きな方はフランスやイタリアかもしれませんね。もしかしたらメルケル首相の名とともに、ドイツを思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれません。今挙げた幾つかのヨーロッパの「大国」に囲まれた狭い地域に、ベルギーという国があります。

口も1100万人と東京都の人口より少ない小国です。しかし経済規模は（国民一人当たりのGDPで）日本と同等です。機械産業、化学産業、そしてゴディバなどのチョコレートで知られる食品産業が盛んです。

国が発展した大きな理由は、この国が地理的に大国のはざま、すなわち「ヨーロッパの十字路」に位置しているからです。中世には手織物、近代以降は石炭の運搬、通商の拠点として、様々な商人がここを往来しました。首都ブリュッセルでは大きな市が開かれ、それが世界遺産「グランプラス」として残っています。また「十字路」ゆえEUやNATOといった国際機関の本部が首都ブリュッセルに集中しています。

北に位置するアントワープは、中世にヨーロッパ最大の貿易港として栄えました。ここを舞台に描かれたのが『フランダースの犬』。日本でのアニメの大ヒットを契機に、アントワープ駅前



EU本部

北に位置するアントワープは、中世にヨーロッパ最大の貿易港として栄えました。ここを舞台に描かれたのが『フランダースの犬』。日本でのアニメの大ヒットを契機に、アントワープ駅前

にネロとパトラッシュの銅像が建てられています。

日本との関係は概ね良好です。

2016年の今年、ベルギーと日本は国交150周年を迎えました。10月には国王夫妻が来日し、たくさんの記念イベントが開催されました。ベルギーはかつて第一次世界大戦時にドイツに占領されましたが、ドイツの空爆によって消失したルーヴェン大学図書館の再建のため、戦後になって当時の裕仁皇太子がご訪問され、多額の寄付が送られました。それを記念して現在の大学図書館には菊の御紋と狛犬が飾られています。

ルーヴェン大学  
図書館全景



菊の御紋と狛犬

### ■言語問題

ベルギーは、「ヨーロッパの十字路」に位置していたため、時の大国が支配下におさめようとして、たびたび戦場にもなりました。ナポレオン最後の戦いの場として知られるワテルローはベルギーにあります。現在のベルギー

がオランダから独立したのは1830年のことですが、既にその時からこの国は多言語国家でした。北方のフランドレン地方はオランダ語を話す人びとが暮らし、南方のワロン地方の人びとはフランス語を話します。ただし首都ブリュッセルは地理的にフランドレン地方に位置しますが、古くからの国際都市として、ベルギーが独立した時点で住民の多くがフランス語を話していました。人口比は、現時点でオランダ語話者6に対してフランス語話者4と言われています。

### ベルギーの連邦構成体▼



独立当初のベルギーは、フランス革命思想の影響を受け、フランス語のみを公用語とする政策を強力に進めましたが、19世紀の後半以降、普通選挙制の導入

など大衆民主主義が発展するに従い、人口で上回るオランダ語話者の公用語化を求める運動（フランデレン運動）が活発になりました。双方の対立を一般に「言語問題」と呼びます。

フランデレン運動の結果、19世紀末には両言語をベルギー全土で公用語とする「平等法」が成立し、さらにナチスの台頭に影響を受けてゲルマン民族主義が高揚した戦間期には、フランデレン地方の公用語をオランダ語に、ワロン地方をフランス語に、そしてブリュッセルを例外的に両語圏とする「地域言語制」を導入しました。

さらに、ベルギーの経済をけん引してきたワロン地方の石炭の需要は、第二次世界大戦後になると低下し、代わってアントワープなど豊かな港を抱えるフランデレン地方への投資が進み、双方の経済的地位は逆転するに至ります。ワロンの炭鉱閉鎖が相次ぐと、炭鉱労働者の抵抗運動（ワロン運動）が始まり、1960年代のベルギーは地域間の経済格差が労働運動に結びつき、それが地域間対立へと飛び火して言語問題が政治化することとなります。68年には大学紛争と結びついて、与党キリスト教政党がフランデレンとワロンの二つの地域政党に分裂し、次いで社会党、自由党といった主要政党も分裂、さらにはフランデレン、ワロン、ブリュッセルを基盤とする地域主義政党も台頭

しました。こうしてベルギーは多数の政党による連立政権の形成が不可欠の国となりました。

こうした状況を打開するために、ベルギーは1970年以降それぞれの地域の自治を認める分権化を進め、計4度の憲法改正を経て、1993年にフランデレン、ワロン、ブリュッセルの三つの地域からなる「連邦国家」であることを宣言しました。連邦国家ベルギーにおいては、ベルギー（国）は外交、安全保障のほか、社会保障以外の権限を有していません。それぞれの地域が権限を有します。この分権改革は現在も漸進的に進められていますが、1993年の時点で多くの人が「これで言語問題は解決に向かう」と考えました。

しかし、その後約20年を経て、ベルギーは再び言語問題に悩まされることになりました。冷戦終結後、急速に進む経済のグローバル化は、市場競争を激しくして、経済的に豊かなフランデレンの税収に依存するワロン経済に対する、フランデレン側の批判を高めていきました。2010年の選挙では、全般的な経済不況のなか、「ワロン不要」「フランデレン独立」そして「ベルギー分裂」を主張するフランデレン主義政党が支持され、第一党となりました。「ベルギー分裂」を主張するフランデレンの政党と、経済的に依存しているワロンの政党との連立交渉は難航し、結局

一年半もの「無政府状態」を経て、第一党の分離主義政党を排除した連立政権が作られました。

今もなおベルギーは「ユーロ危機」の痛手（金融機関救済のための公的資金投入による財政赤字）から立ち直っておらず、緊縮財政政策を余儀なくされており、経済政策をめぐってフランデレンとワロンはしばしば対立しています。

### ■「テロの温床」でも…

こうしたなかでベルギーを襲ったのが、2015年11月のパリ同時多発テロでした。この主犯格がISに影響を受けた北アフリカ系移民のベルギー人とされ、彼らがアジトにしていたのがブリュッセルのスラム街、モレンベークでした。

国際的な批判を浴び、ベルギー当局は徹底した対テロ・オペレーションを遂行しました。次々とテロリストを逮捕していききましたが、そのさなかの3月22日、今度はブリュッセルで連続自爆テロが生じ、

200名以上の死傷者が出ました。

それ以降、ベルギー当局はさらに捜査に力を入れていますが、執筆時点で今なおシリア帰りの



イスラム系テロ容疑者が50名以上は潜んでいるとされ、警戒レベルは高いままです。繁華街では銃を構えた兵士が警備にあたっています。

一見ベルギーはテロとの戦場と化してしまっただけのような印象を持つかもしれませんが、しかし、独立以来、ベルギーはなお「十字路」に立ち続けています。多民族の共存を苦しみながらも可能としてきた国として、また古くから多くの人びとが往来してきた国として、存続しています。テロの後、ベルギーの人びとはより他者に寛容になったという報告もあります。「自治と共存」がこの国のレゾン・デタです。私も8月に行ってきましたが、空港や大手百貨店などの警備はかなり厳重になっていました。市民は——気が抜けるほど——変わらないままです。

——変わらないままです。

皆、美味しいムール貝を肴にビールを味わい、このアジア人を受け入れてくれます。

自らが抱えた「多言語」という苦悩、そして他者に寛容ゆえに抱えたテロの問題に悩まされながら、それでもベルギーはそのままベルギーであり続けています。この苦悩と今後の展開に注目したいと思います。

### 参考文献

松尾秀哉『物語 ベルギーの歴史』（中公新書・2014年）  
松尾秀哉『連邦国家 ベルギー』（吉田書店・2015年）

# 逆境を いかに 生み出すか

法学部講師

なかじょう みわ  
中條 美和



私は、生まれつきの重度聴覚障害で、今の聴力レベルは両耳とも100dB、補聴器をしない状態では新幹線の音も聞こえず、障害者手帳は2級です。両親も姉も皆「健聴」（聴覚障害ではない）で、私だけが難聴という家庭で育ちました。ろう学校には通わず、普通の学校に所属しながら言語聴覚士のいる「ことばの教室」に通い、発音の訓練や口話（口の形を読みながら聞く方法）を身に付けました。幼少時には手話を覚えると耳を使わなくなるという理由で手話を覚える機会はなく、健聴である家族の誰も手話を使わず、手話を覚えたのは大学に入ってからです。

現在は新生児の段階で聴力障害を発見することができましたが、私が生まれたころはそのような検査はありませんでした。私の難聴が判明したのは、小学校に入ってからです。私の発音が通じないことが多々あり、担任の先生のすすめで聴力検査を受けたら両耳とも聴力レベルは70dBでした（耳元での大声会話で聞こえるレベル）。私は「アイスクリームよ」と言われると違う部屋にいても飛んできた子供だったので、両親はまさか私が聞こえていないとは思わなかったようです。

私は、自分が聞こえないことで何かを制限されたという記憶があまり

ありません。むしろ聞こえないからと理由で選択した結果がよい状況をもたらしていることが多いです。例えば、進行性難聴であったことから、聴力を低下させないためにはできるだけストレスを避けたほうがよいという理由で、大きなストレスがかかる大学入試を避けて高校から推薦をとるよう、早い段階ですすめられました。このため、中高一貫制の中学に入學したときから毎日こつこつと勉強する習慣が身につく、結果的には大学入試を普通に経験し、東京大学に入りました。このような経緯から、私としては、聞こえないから東大に行けたという感覚があります。

聞こえなかったことが、むしろよかったと思うことはまだ他にもあります。私は次女ということもあり、さらに障害もわかり、両親から全く期待されずに伸び伸びと育ちました。「普通に」成長してくればよいという両親のシンプルな願いが私にはよい影響をもたらしたと思います。また、自分にはすでに障害があるのだから、自分の生活を立てることがまず先で、例えばボランティアを進んで行うなど困難な道を自ら選ぶ必要はないのではないかという認識が小さい頃からありました。つまり、すでに与えられた試験をこなせばよく、自ら取りに行く必要がない。それってラッキーなこと

とじゃないかと思うわけです。

その他にも、小学校低学年の時から他校の「ことばの教室」に通ったり、教室でも常に一番前に座っていたり、両耳に補聴器をしていたりと、どっちみち目立ってしまう、そもそも自分は他の人とは違うという状況を幼少時から受け入れていました。そのため、みんなと違っていいのだ、どうせ違うのだから自分の個性を出して行けばいい、と思うようになりました。今となっては、むしろ聞こえるより聞こえない方がカッコいい、クールだと思っています。

聞こえない方がいいこと、まだまだあります。それはアメリカに留学した時に感じました。健聴の日本人留学生は、英語が思うように話せず、スムーズに聞き取れないこと、したがって討論の多いアメリカの授業では評価も低くなりがちなこと悩んでいました。私の場合、聴覚障害のある私に英会話を要求するアメリカ人はおらず、筆談やチャットといった方法で読めて書けることができればいいので健聴の日本人留学生よりは精神的に楽でした。また、留学生の多くは大学内でしか友達ができませんが、私の場合はアメリカ手話を使うことで現地のろう者・難聴者と触れ合う機会が多くなります。どこに行ってもローカルなコミュニティに入っていける、同じ



障害の人と国籍を超えて連帯感をもてる、というメリットがあるのです。

聞こえない方がいいことが多々ある一方で、もちろん障害は障害として存在しています。私は、小学校のときは両耳の補聴器と口話（先生の口を読む）のみで授業を受けました。聞き漏らした情報は自覚している以上にあると思いますが、小学生全員が100%授業を聞いているとは思えません。中学と高校からは、FM補聴器（先生のマイクから私の補聴器に音を飛ばす方法）を用いて授業を受けました。

私が東京大学に入学した当時は、障害学生支援室がどの大学にもなく、現在は制度化されつつあるノートテイク（聴覚障害学生のために隣でノートをとり同時に見せる方法）もいませんでした。高校まで使用していたFM補聴器は、大学の広い教室では限界があり、またマイクが1つしかないことから討論型の授業には参加できませんでした。学部4年間で「情報保障」の得られないままなとなくやりすごし、研究したかったのでそのまま大学院に進学しました。

当時の私にとって最大の問題は、英語でした。英語の読み書きはできても、話すこと、聞くことが問題でした。みなさんにも、どこまでが自分の努力不足でどこまでが自分にはそもそも無理なのかという線引きが難しい状

況というのは数多くあると思います。私にとって「英会話」がこれにあたりました。当初は自分の努力不足だと思い、英会話が大変なコンプレックスでした。口話によって（日本語の）会話が「普通に」できているのなら、英

会話だってできるはずと思う・思われる一方で、日本語ですら幼少時に「ことばの教室」に通って訓練したわけだからその機会を逃した英会話が普通にできるようになるのだろうかという疑問の間で葛藤がありました。したがって、留学など絶対せずに日本でこつこつ研究しようと思っていました。結果的に留学することになったのは、計量政治学はアメリカに留学するのがベストという状況だったからです。また、アメリカなら障害者に対する支援が整っている、聞こえなくてもできる、聞こえなくてもよい、むしろ英会話など必要ないということがわかったのが大きかったです。

2002年から短期や長期留学、学会参加を含め、アメリカの各地で障害学生に対する支援を経験しました。ミシガン、テキサス、シカゴ、ワシントンD.C.など、いろいろな場所ですべてを受けて授業や学会に参加してきました。「障害のあるアメリカ人法（ADA）」のおかげで、どこでも要望すれば、パソコン筆記もしくはアメリカ手話の通訳が派遣されてきたので、無理に英

語を話さなくてもいいし、聞かなくてもよく、先述したように健聴の留学生よりははるかに楽だったと思います。

聞こえる・聞こえないに関係なく、つまり自分が抱えている何らかの社会的な制限に関わりなく、自分のやりたいことをやるのが一番です。そのためには何をやりたいかを見つけねばなりません。私の場合は、小学校のころから政治に興味があり、中学のころには政治学の研究者になりたいと決めていました。進路選択の時に、幼少時から私を診てきた耳鼻咽喉科の医師に「理系は研究室ごとに行動し、先生の面倒見がいいから、理系に行った方がいい」とすすめられたことがあります。でも、政治学を修めたかったので、理系にはいわずに政治学の世界に進みました。

やりたいことをやっている、自分で決めた道を進んでいるので、多少の障害があってもなんとかなるのかもしれない。今の状況においても情報保障は万全とは言えません。社会に対して、職場に対して、粘り強く交渉していく必要があります。身体障害にしろ、何らかの社会的な制限にしろ、このような問題を抱えているとき、社会に存在する壁を除去することにどれだけ自分のコストをかけるか、もめた時にどれだけ自分の時間を費やすのかを考えなければなりません。そんなにコストを

かけたくなければ、やりたいことを少し曲げて生きていくのも1つの手かもしれません。また、壁をそのままにして自分の生活を守ることを第一とすることも選択肢の1つです。一方で、自分と同じ状況の後に続く人のこともちらっと頭をかすめます。ある程度自分が道を切り開いて、後に続く人のためにも道を整えていかなければならないと思う反面、そんなの背負ってられないと思うこともあり、バランスが難しいです。

私は、聞こえないから逆に、皆が私に自分の話を聞いてもらいたいと思う存在を目指しています。そうすれば、私に話を聞いてもらいたいから、周りの人が私に対するコミュニケーションを工夫してくれるようになる。みなさんも、障害の有無に関わらず、無視されない・尊重される立場になってください。どの分野でもいいからそういう存在、尊敬される人になることを目指したらどうでしょうか。私は、せっかく聞こえないのだから、それを楽しんでしまおうと生きてきました。みなさんも何らかの問題を抱えたとき、むしろそれを楽しむ、クールに思う、という感じで生きてみたらどうですか。何もない人生よりはるかに楽しいのではないかと思います。



今年の8月8日から9月1日まで、北海学園大学と北海商科大学の学生15名による海外研修の引率者として、カナダはアルバータ州レスブリッジにあるレスブリッジ大学に行ってきました。引率者は他に人文学部のジェレミー・ブシャー先生です。日本を離れる前は見知らぬ土地で3週間以上も生活する自分の姿を想像できませんでした。が、先生、学生たち、そして現地で出会った人たちのおかげで楽しい毎日を送ることができました。まだ記憶が鮮明なうちに、少しでも旅の思い出を綴らせてください。

さて、レスブリッジという町をご存知ですか？レスブリッジは日本から8000km以上も離れた場所にある緑豊かな小都市です。東京からカルガリー国際空港まで9時間半に及ぶ長いフライトの後、さらにバスで2時間半かけてようやくたどり着きました。日本との時差はマイナス15時間（サマータイム期間中）。日本時間から3時間



カルガリー国際空港にて

引いて昼夜をひっくり返すと、簡単に現地時間を知ることができました。例えば、日本が午前10時だったとしたら、レスブリッジは前日の午後7時というわけです。

レスブリッジに到着後、しばらくして二つの異変に気づきました。一つは汗をかかないということです。もちろん全くなかないわけではないのですが、かいてもあまり尾を引かず、いつの間にか乾いてしまします。日本とは違って乾燥しているのです。そのことで、現地の人が面白いことを教えてくれました。カナダっ子は雨の日でもあまり傘を差さない（すぐに乾くので）というのです。ある雨降りの朝、私もカナダっ子に倣って、傘を差さずに外を歩いてみました。少し癖になりそうに解放感だったことを覚えています。びしょ濡れのまま目的地に到着すると、あろうことか、そこには強烈な冷房（日本の、それも北海道の人たちの感覚からすると、こちらの冷房は相当強く感じると思います）が作動していました。確かに乾きは早かったような気がします。が、あまりの寒さでそれど

ころではありませんでした。

もう一つは日照時間の長さです。左の写真は大学のすぐ近くで撮影したのですが、なんとこの明るさで午後8時半なのです！私たちの背後にはこの辺りを象徴する景観である「クワリー（峡谷）」と、レスブリッジの中心街が見えます。こちらの西日は強烈なので、日中同様にサングラスと日焼け止めが欠かせません（ブシャー先生は相当眩しかったようです）。日が落ちて辺りがすっかり闇に包まれるのは午後9時を過ぎてから。



西日を浴びるブシャー先生と私

到着当初は時差とこの日の長さになかなか慣れず、宵っ張りの早起き生活が続きました。

現地滞在中、とても興味深かったことのひとつが、カナダの人たちとのコミュニケーションです。『Take you! (You're welcome)』これらを発さない日はなかったのではないかと、というくらい実によく使いました。たとえば扉を開けてあげたり開けてもらったりしたとき、「ありがとう」「どういたしまして」は当然のやりとりではあります。日本だと「どういたしまして」は省かれることが多いですし、

近頃は「ありがとう」も省く輩が増えたようにも思います。それに対して、私が出会ったカナダの人たちは100%、このやりとりを怠りませんでした。反応が返ってくるというのは気持ちのよいものです。

また、こちらでは（他の国も同じかもしれませんが）レストランのウェイターやウェイトレスはただ注文を取って料理を運んでくれるだけでなく、必ず「料理の味はどう？」と尋ねてきます。もし客が「おすすめは？」と尋ねると、時間をかけて丁寧に説明してくれます。カナダの人たちのコミュニケーションには常に相手への配慮があり、そのことにいちいち私は感心してしまいました。ついでに余談ながら、「日本人はよく謝る」と昔から言われていますが、実はカナダ人も結構謝るのだそうです。ひよつとすると、彼らのコミュニケーションは私たち日本人にとって親近感のわくものなかもしれません。



学内見学中の学生たち

学生たちについても少し触れたいと思います。彼らはホームステイをしながら毎日大学に通いました。たいてい午前中に英語の授業を受けて、午後



からはアクティビティ(学外行事や社会活動など)に参加したり、講演を聞いたりました。彼らの特徴を一言で表すなら「元気がよすぎる!」でしょう。というのも、アクティビティの中には彼らが好きなコースを選択できる場面が何度あったのですが、彼らはその全てにおいて最もアクティブ(時に過酷)な選択をしたからです。



授業に臨む学生たち

私が彼らの選択で最も印象に残っているのは、カルガリーにあるカナダ・オリンピック・パークで行ったリュージュ体験です。雨まじりの強風が吹き荒ぶ中、彼らは「ショッピンング」もしくは「直帰」という選択肢があったにも関わらず、なぜにこれを選んだのか! しかも、一度ならず二度も体験した!! 一度目は「Are you crazy?」と笑いながら声をかけてくれた係員も二度目は無表情でした。今となっては楽しい思い出ですが、当時は翌日から風邪を引いて寝込む学生が出ないかと気が気でありませんでした。

学生たちは日本に在る間に研修参加申込書を通じて自分たちが興味を持っていることなどをレスブリッジ大学側に

伝えるのですが、レスブリッジ大学の担当者はそれを読み、「今回は相当アクティブな連中がやってくる」と予想してプログラムを組んでくれたそうです。若さいっぱい、彼らと過ごしたこの夏の日々は、私にとっけがえのない宝物となりました。



リュージュを体験した学生たち

いろいろなことを書いているうちに、大事なことがすっかり後回しになってしまいました。

カナダと言えば、忘れてはならないのが圧倒的なスケールの大自然でしょう。私たちはアクティビティを通じて数えきれないほどの素晴らしい体験をしました。その中でも特に印象的だったのが、ウォータートン国立公園とバンフ国立公園(いずれも世界遺産)で見た光景です。

ウォータートン国立公園では、これまで学生たち全員が「登山」というアクティブな選択をしたため、40分ほどかけて「ベアーズ・ハンブ」に登りました。そこから見た雄大なカナディアン・ロッキーの山並みや眼下に広がる美しい湖は、思わず叫び声を上げたくなるくらい素晴らしい景色でした。また、バンフ国立公園では「レイク・ルイズ」

ズ「モレイン・レイク」という二つの神秘的な色をした湖を見ました。「入浴剤のような……」という貧しい喩えしか浮かばない自分が情けないですが、それはもう言葉にならない美しさでした。湖を取り囲む険しい山々に残る氷河もまた、日本ではまず目にするこのできない貴重な眺めでした。なお、このいずれの国立公園でも私たちはブラウン・ベアーに遭遇(安全に)したことを書き添えておきます。



レイク・ルイズにて



モレイン・レイクにて



ベアーズ・ハンブ(1,778m)からの眺め

たくさん思い出が詰まった海外研修を終え、あつという間に月日が流れていきますが、レスブリッジ大学との繋がりは続いています。10月のよく晴れたある日、レスブリッジ大学からの交換教授として本学に赴任中のDr. Edwin Wasieleskiと奥様のMs. Katherine Wasieleskiをお連れして、紅葉に染まる定山溪をドライブしてきました。研修中は現地の人たちに本当にお世話になりました。これからも機会を見つけては恩返しをしていきたいと思っています。



定山溪温泉の足湯にて

## お知らせ

本館開架3階の  
旅行ガイドブックを刷新しました。

- 『地球の歩き方』(海外)
- 『ことりっぷ』(海外・国内)
- 『ブルーガイドでくつくつ歩き』(国内)

継続購入中の『地球の歩き方 Resort Style』『地球の歩き方 Japan 島旅』もぜひご利用ください。

大学内にある“U of L Theatre”にて





## 図書館貸出 資料の返却のお願い

卒業年次・修了年次の方の図書館資料の利用期限は、卒業証書・学位授与式の前日までです。貸出を受けた図書館資料は必ず期限(別記の図書館からのお知らせ要参照)までにご返却ください。

卒業年次・修了年次の方で、次年度4月以降も本学に引き続き在籍する場合は、図書館資料の継続利用が可能です。(大学院生の研究図書等)。

継続利用を希望する場合は、図書館2Fのサービスカウンタースタッフにお申し出ください。

## 卒業・修了後の 本学図書館利用について

本学を卒業・修了された方は、卒業後も引き続き図書館を利用することができます。

ただし、改めて利用者登録をする必要がありますので、卒業・修了後初めて図書館を利用される際は、必ず図書館2Fのサービスカウンターで利用者登録を済ませてください。

希望者には、ライブラリーカードを発行しております。ライブラリーカードの発行により、図書館資料の貸出が可能になります。(ライブラリーカードは年度更新です。)

貸出冊数は5冊、貸出日数は15日間です。

なお、本学定期試験に伴い、利用をご遠慮いただく場合がございます。

ご理解・ご協力をお願い申し上げます。

## 編集後記



本格的に冬到来で、熱々のおでんや火鍋が恋しい季節になりましたね。これから、忘年会・クリスマスなどで、街へ出かける機会が多いと思いますが、インフルエンザに気をつけて楽しく過ごしましょう。今回お忙しい中、執筆していただいた教員・図書館職員の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。誠にありがとうございます。また今年も図書館だよりによりに多方面のご協力・ご指導を賜り、心よりお礼申し上げます。ちょっと早いですが、来年も皆様にとって良い年であることをお祈り申し上げます。良いお年を!!!

## 図書館からのお知らせ

### 冬季休業期間の長期貸出

期間：平成28年12月5日(月)～12月26日(月)

長期貸出返却日：平成29年1月11日(水)

### 春季休業期間の長期貸出

期間：平成29年1月21日(土)～3月24日(金)

長期貸出返却日：

卒業生……………3月17日(金)

OB・科目履修生・研究生…3月31日(金)

一般学生……………4月7日(金)

### 日曜特別開館(豊平校舎図書館のみ)

平成29年1月22日・29日 10:00～16:00

### 日曜・祝日以外の閉館日

冬 期 休 業：平成28年12月27日(火)

～平成29年1月7日(土)

センター試験：平成29年1月14日(土)

入 学 試 験：平成29年2月9日(木)～2月11日(土)

蔵 書 点 検：平成29年2月15日(水)～2月17日(金)

### 開館時間変更

センター試験準備日に伴う開館時間短縮：

平成29年1月13日(金) 9:00～17:00

皆さまからの、本冊子に対するご感想を下記のアドレス宛にお寄せください。今後の内容充実のために活用させていただきます。  
なお、お寄せいただいたご意見・ご感想についての回答はいたしませんので、あらかじめご了承ください。

▶▶▶ lib@tyhr.hokkai-s-u.ac.jp